
損なはなし

成無己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

損なはなし

【コード】

N3584D

【作者名】

成無己

【あらすじ】

秋も終わりに近づくある日、祐樹は街灯の下で傘も差していない女の子を見つける。

十月の終わり、静かに降る雨は冷たかった。いつもならまだ夕方と呼べる時間、辺りはすでに影が溶け込むほどに暗くなっている。

祐樹は大学からの帰り道にいた。傘を持つために剥きだしになった右手が赤くなって寒さを訴えている。たまに左手に持ち替えてもうまく馴染まず、結局右手で持つことになる。

右手の冷たさが全身に染みていくような寒さ。雨は傘を叩く音も地面に落ちる音もなく、静かに降っていた。そんな日に、誰かが街灯の下で座り込んでいるのを祐樹は見つけた。傘も差さずにただ濡れている。

長い髪と白く細い四肢からおそらく女性。黒い髪が濡れて濃さを増し、見るからに重そうだった。

思わず足を止めてしまってから、祐樹はしまったと思った。正直絶対に関わりたくないし、何より一刻も早く帰って温まりたかった。それでも一度見てしまったものを見なかったことにするのは気が引ける。

面倒を避ける方法では分かっている。しかし、足は動いてくれない。

こうなった時、祐樹の取る行動はいつも同じだった。

「風邪ひくぞ？」

傘でその子に降る雨を遮る。特に驚いた様子も見せずをゆっくりと上がった顔は、高校生、もしくはそれより下にも見えた。

呆けたような顔で祐樹を見て、そして少し笑った。

「……良い人だねー、お兄さん。普通は見えても素通りするのに」「ああ。おかげで彼女もいねえよ」

女の子があはは、と声に出して笑った。間の抜けた、のんびりと

した笑いだった。

「それで。こんなところで何をやってるんだ？」

祐樹の問いに、女の子は少し困ったような顔になった。

そして、後ろからダンボールの箱を取り出した。雨に濡れて、真っ直ぐ立つこともできないほどにふやけている。蓋が閉まっではないが、もう溶けかけていつ破れてもおかしくない状態だった。

ただ祐樹には見た目以上のことがは分からなかった。首を傾げると女の子がその蓋を開いた。

子猫がいた。

祐樹の掌より小さな猫。

今にも崩れてしまいそうなダンボールの中、隅っこで震えている。下に敷いてあるタオルは、見ただけでもう絞れるほど濡れているとわかる。ほとんど汚れていないタオルの、その白さを祐樹は嫌だと思った。

女の子はそれを見せただけで何も言わなかった。ただ猫を見つめていた。

祐樹も何も言わなかった。女の子が何を言いたいのかはだいたいわかっていたし、それが簡単に人に頼めることでないこともわかっていた。

ほんの少しだけ考えてから、祐樹は猫を抱え上げた。まったく抵抗しない猫から雫が滴る。

少し躊躇してから猫を襟元から服の中に入れ、お腹の辺りで受け止める。想像を絶した冷たさに、おもわず小さくうめき声が出た。

女の子がクスリと笑った。

冷たさに耐えられるようになってから、祐樹は聞いた。

「おまえさんはこんな猫一匹のために行けなかったのか？ ずい分と人がいいんだな」

「うん。おかげで未だに彷徨ってる」

笑えねえよ、と祐樹は笑った。女の子も笑った。

「その子、大丈夫？」

と女の子が祐樹の腹部を指差して聞いてきた。もちろん中に入っている子猫のことを聞いている。

「大丈夫だろ？俺一応医学部だし。まあ、動物はよくわかんねえけど……。でも震えてるってことは、まだ体が生きようとしてるってことだから、きつと大丈夫だろ。それに俺、獣医見習の友達もいるし。明日にでも行ってみるよ」

それだけ言っただけで祐樹は女の子の頭に傘を被せるように置いた。わっ、といきなり視界をふさがれた女の子が声を漏らす。慌てて傘をどけた時、祐樹はもう女の子の背中を向け歩き出していた。

「おまえ、化けて出るのかまわなけれど雨の日はやめとけ、痛々しすぎる。出るんだったら傘ぐらい準備しとけ」

早足で歩きながら祐樹が言った。女の子は何も言わなかった。それっきり、祐樹が振り返ることはなかった。

結局、祐樹はその日の内に獣医の友人の所へ子猫を持っていった。次の日でもいいと思っていたが、なんとなく待てなかった。

一週間後。

気持ちの良い秋晴れの日。風は既に冬そのものだが、青空がきれいだった。

今日は午前で授業が終わり、午後から何をしようか？そんなことを考えながら祐樹は家に向かっていった。

子猫はすっかり元気になった。今は祐樹の家で暮らしている。

ちょうどその猫を拾った場所、雨の日のことが思い出される。あいつ、無事に行けたんかな？などと少し考えてみた。

祐樹の足が止まった。

思い出に浸ったからではなく、今は光る必要のない街灯の下。

そこに、晴れの日のなのに傘を差した女の子がいた。おそらく高校生かもっと下。

正直絶対に関わりたくないが、既に一度関わってしまったためど

うしようもなかった。

傘の下の女の子が近づくと祐樹に気がついた。

呆けたような顔が祐樹を見て、そして少し笑った。

(後書き)

感想、ご指摘等ありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3584d/>

損なはなし

2010年11月5日10時20分発行